

団体名	広島県	所属	県立広島学園	他団体等との連携	東広島青少年オーケストラ等
連絡先	総務課 (082) 429-0351				

取組事例名	学園祭の開催を通じた地域交流	取組期間	平成23年度
--------------	----------------	-------------	--------

取組の概要 ～ 地域交流の充実

児童自立支援施設である本学園の最重要課題の一つに地域交流の充実がある。児童及び学園を多くの方に知ってもらい、理解者・支援者が増えることは児童の最善の利益につながるからである。

このため、地域交流の最も重要なイベントである学園祭を充実させるために、はじめての試みとして「児童と来園者が一緒に学園祭を盛り上げる」ことをコンセプトとしたオーケストラと児童のコラボレーションによる合唱を企画・実施した。

取組の背景 ～ 地域との交流による理解促進が不可欠

地域交流は児童の成長や学園にとって欠かせないものである。

児童は、交流を通じて自分を「見てくれる、認めてくれる」大人の存在を知ることによって安心感が生まれ、褒められ達成感を味わうことで自信につながる。また学園にとっても一般的な悪いイメージを払拭して理解者・支援者を増やすとともに、保護者や関係者の信頼を得ることができる。

こうしたことから、従来の地域交流を更に前進させる不断の取組が必要となっている。

取組のねらい ～ 良き理解者・支援者を

児童及び学園をより多くの方に知ってもらい、良き理解者・支援者を増やすこと。

児童にとって学園は一定期間の入所を通じて自らの課題に気づき改善する場であるが、本来の居場所は地元地域である。退園後、地域に戻った児童が学園での成長を定着させ、困難に直面しながらも地域で生活していくためには良き理解者・支援者の存在が非常に重要である。

取組の具体的内容 ～ 児童とオーケストラのコラボレーション

学園祭は地域住民や支援団体、ボランティア、関係機関など外部から多くの方が集まる場であることから理解者・支援者を拡大するチャンスと捉え、学園祭企画メンバーが中心となってアイデアを練り、「オーケストラを呼んで子ども達と来園者が一緒に学園祭を盛り上げる」という新たな企画に挑戦した。

そのため、『東広島青少年音楽活動支援オーケストラ』及び『エリザベート音楽大学学生オーケストラ』に児童の合唱曲を伴奏してもらうとともに、広島大学教育学部の協力の下、学園祭の1か月前から同学部の学生に音楽の授業に参加してもらい合唱の指導を行った。

このような連携によって、学園祭当日はオーケストラの伴奏で児童の素晴らしい歌声が体育館いっぱいに響き渡り、たいへん充実した音楽発表となった。



(学園祭の様子)

取組を進めていく中での課題・問題点 ～ はじめての試みへの不安

企画会議の中で懸念や反対意見もあった。

- (1) 学園祭の主役は児童である。オーケストラが目立ち、また児童の声がかき消されてしまっは本末転倒にならないか。
- (2) 観客席が狭くなり過ぎないか。これも地域交流の趣旨から本末転倒にならないか。
- (3) 大掛かりな楽器の搬出入で混乱しないか。他のプログラムに影響が出ないか。

創意工夫した点 ～ 事前の準備を万全に

(1) 児童が主役

「児童が主役」の原則を念頭に置いて、広島大学教育学部に協力を依頼し、同学部の学生に学園祭の1か月前から合唱指導をお願いするとともに、寮生活の中でもしっかりと練習に取り組み、指揮者にも学園祭の趣旨や職員の懸念に対する最大限の配慮をお願いした。

(2) 来園者への配慮等

オーケストラのスペースを最小限にして保護者・観客席への影響を抑え、楽器の搬出入の導線・保管場所を確保して混乱しないようにした。また、オーケストラメンバーのほとんどが、学園祭への参加がはじめてだったので、合唱・合奏の部の終了後も引き続き児童の発表を観てもらった。

(3) 最後はやってみよう！

はじめてのことなので不安も多いが、最後は失敗を恐れずとにかく「子ども達のためにやってみよう」ということで取り組んだ。

取組の成果（効果） ～ 児童も来園者も感動！次へのステップへ

(1) 感動そして交流の進展

児童はオーケストラの生演奏を聞いて「すごい！」と純粋に感動し、その中で合唱できたことを「よかった」、「うれしかった」と感想を述べ、非常に貴重な体験となった。

来園者からは驚きとともにすばらしい取組であるとの評価を受け、引き続き作文朗読等の発表を観ていただいたオーケストラメンバーからは「児童のイメージが変わった」と言われるなど、新たな理解者の輪が広がったことを実感できた。

(2) ステップアップ

今回の成功を機に職員の姿勢もより積極的になった。翌平成24年度の学園祭では「来園者に感想をもらおう」、「児童の発表を観るだけでなく、直接ふれあう機会を創ってはどうか」といった企画提案があり、来園者に感想を書いてもらうとともに、昼休みの食事提供やバザーを児童が店頭で立って行った。

来園者の主な感想をみると「直接ふれあうことができ有意義であった」、「次回は友人を誘って来たい」、「練習が良くできていて職員の指導の賜物」、「音楽発表に感動した」、「暖かい家庭に帰れるとよいですね」、「涙が出そうでした」、「学園児童のイメージが変わった」など、児童や学園に対する来園者の理解がさらに深まっていることが実感できた。

今後の展開 ～ 次なるステップ・児童が地域へ

学園祭はもちろん、多くの方に参加してもらおう運動会をはじめ、収穫祭、クリスマス会、餅つき大会、施設見学の開催等、地域の方々とふれあう機会を、前例にとらわれることなく一層充実させていきたい。

新たな交流事業も生まれてきており、平成24年度には児童とともに行う植樹事業（三菱UFJ環境財団）を実施。平成25年度には、専門家による熱気球試乗体験や紙飛行機づくり体験の開催（地域の小学生や保護者も参加）、さらに地域へ出向いた奉仕活動を通じて交流を深めることを企画している。

他団体へのアドバイス ～ 現状に甘んじない、チャレンジ精神

サービスの客体は誰で、組織の目的は何なのか。現状はそれを達成しているのか、課題は何か。もっと良い・効果的なサービスができないか。現状に満足することなく常に反芻しながらアイデアを練り、失敗を恐れることなくチャレンジすることが重要である。

また、児童の健全育成の観点では、関係機関・団体・地域住民等が役割分担を行い、有機的に連携した取組が重要である。市町には広島学園のような児童自立支援施設はないが、小中学校等においても共通した課題があるのではないかと思う。

その際、特に地域住民・支援者との協働が重要である。そのために交流を通じた相互理解が不可欠であり、ここに紹介した広島学園の取組を参考にいただければ幸いである。